

報



會

會 岳 山 本 日

48

月 七 年 十 和 昭

山岳遭難救助機關案懸賞募集趣意書

凡そ山岳遭難ほど、登山年代誌の上に慘ましくも暗い陰を投げるものはない。然も近年の趨勢を見るに遭難は増加の一途を辿りつゝある。登山道の普及發達は勿論我々の希ふ所、艱難と危険とを乗り越えて進む果敢なる登攀の力行亦我々の望む所である。然し、我々は現實の問題として年を逐うて増加する山岳遭難の事實に對し目を蔽ふことが出来なない。之が對策は洵に我國登山界全體の共通問題として審議解決せられなければならない事態に立到つてゐる。

遭難は先づ防止されなければならぬ。日本山岳會はその創立の當初専ら一般社會に對し、如何に登山が奇矯なる遊戲に非るかを諒解せしめることに力を盡した。然し今日、我々は寧ろ登山の危険を力説し、登山者の自重、自制の要を強調し、社會的責任感の上からも一層の覺醒を促すの必要に迫られて居る。

遭難の頻發は更に他の重大なる問題を提出する。遭難救助機關の問題が是である。一旦惹起した以上、遭難の善後は迅速且適當に處理されなければならぬ。蓋し山岳遭難救助の機關は登山の普及發達と併行して發達すべきである。登山の一般化に於ても登山精神の徹底に於ても他に譲ることなき我國登山界が、此の救

助機關に於てのみ遺憾ながら他に一籌を輸する状態にあるは我國登山界にとつて重大なる問題と云はなければならぬ。日本山岳會が山岳遭難救助機關確立を目指して微力を致すの決意をなすに至つた所以は茲に存する。

各地に支部を有する獨逸山岳會又は瑞西山岳會と、その組織を異にする日本山岳會は、會自らが主體となつて統率的に救助機關を作り得る立場にない。隨つて會としては我國の現状に即し、各地に於て實施可能な救助機關の一雛形を提案し、各般の機關を通じて之が實施氣運の醸成に努力し得るに止る。目下の問題が理想案の作製に非ずして、實行性に富む具體案の立案にあるからである。勿論現存せる機關を基礎として改良案を樹立すべきであらば大いに可、必要に應じては今日散在せる地方的の設備相互間の聯絡達成も考ふべきであらう。立案に際し廣く遭難救助機關案を天下に求める所以は茲にある。問題は繰返し述べた通り我國登山界の共通の問題であり、凡ての關係者の協力なくしては解決不能なるものである。創立三十年を記念して日本山岳會が此の重大問題解決の爲に何等かの貢獻をなす事を得ば幸之に過るものはない。

山岳遭難救助機關案懸賞應募規定

一、字数 四百字詰原稿用紙二十枚以内

二、文體 自由（字體明瞭なるを要す）

三、應募資格 團體たる個人たるを問はず

（案文には應募者住所、氏名、職業、年齢明記のこと）

四、締切期日 昭和十一年十一月末日

五、審査 日本山岳會山岳遭難救助機關案審査委員會

六、懸賞金 一等 百圓 一人
二等 五十圓 二人
三等 三十圓 三人

（發表と同時に送金す）

七、發表期日 昭和十一年一月

八、發表項目 當選者氏名 當選全文

九、發表方法 全應募者に對しては各直接に、一般に對しては本會發行「會報」並に「山岳」による

十、返却 應募文は一切返却せず

十一、送先 東京市芝區琴平町一不二屋ビル

日本山岳會事務所内
山岳遭難救助機關案審査委員會宛
日本山岳會に於いて目下案文作製上參考たるべき資料（内外の救助機關例等）作製中九月出

來の見込、希望者は上記日本山岳會事務所宛申出で置かれたし印刷出來の上申込順により發送のこと。

應募者への希望

日本山岳會審査委員會

山岳遭難救助機關案を廣く募集する理由は少しも多く我が國各地の實際の經驗に基いた材料を蒐集し、如何なるものであれば山岳遭難救助の目的に適ひ、且つ實施可能であるかを見究める爲めでありませぬ。日本山岳自身としても諸外國の救助規定等は調査を進めてあります。然し、之は單なる參考材料に過ぎず、結局我が國に實行されるものは日本の實情に即したものでなければなりません。隨つて應募者はその地方々々に現存する實情を基礎として、色々の經驗から今日迄の失敗や成功の實績を併せ考へた上で、之ならば目的にも適ひ然も實行出來ると考へられる案を提出して戴きたいのです。問題は趣意書にも書いてありますやうに、登山に直接間接に關係する者全體の問題であります。従つて、汎い範圍からの協力があつて初めて公正適切な案が出来得るものであります。應募者の參考迄に、此の問題に關して、どんな點が特に注意を要するかを若干左に書きしりました。然し、之は何處までも一つの參考材料に過ぎませぬ。更に多くの點が考慮

ざる可きであるかも知れず、或は又問題の取扱方が見當違ひでないとも斷言出来ません。要は山で遭難者があつた場合、何人が、如何なる組織を以つて、如何に救助するかを現實の問題として考へて下さればよいのです。海に水難救済組織あり、火災に對しては消防制度が全国的に出来てゐます。山では果して何を作つたならばよいのであらうか。如何なる精神の下に如何なる機關が之を處理すべきであるか、こんなことを考へて戴き度いのです。

首尾整つた提案があれば勿論之に越したことはありません。然し、假令、各般の事項に就いて萬遍ない考慮を拂はぬ部分的な提案であつても立案の参考として何等かの資料となるものであれば、我々は歓迎する次第です。又現時の實情に於てはかかる機關の確立は困難乃至不可能であるといふやうな意見を書いて戴くこともその理由次第では参考になりませう。要するに事遭難救助に關する以上大小を問はず色々の提案、意見の發表を希望するわけでありませう。

案文に對する説明、希望、それに關係した實例等を添附されることは自由であり、之によつて我々が益する所も少なくないと思ひます。案文に於いては字數の制限がありますが、此の添附案文に關しては一切制限を附しません、如何なる事柄であつても遭難救助に關係した材料である限り大いに歓迎するものであると言

ふ外に他意ありません。

最後に繰返して此の遭難救助問題の最も重大な鍵を握るものが山岳地方の地元關係者であることを述べて置きます。従つて我々は殊に現地からの應募協力を切望して止まない次第であります。

参考項目

救助機關は地方的なること

實例に見る救助組織には二つの種類がある。二三の國では全国的に統一された組織があり一つの中央機關から地方の救助機關が分れて出るのである。然し又、國によつては地方々々で型を異にした組織のあるものもある。今日日本の問題としては、第一に實行可能性のあるものを考へることであるから、先づ地方々々での組織を作り上げるのが急務であるのではないかと考へられる。即ち今問題となつてゐる救助機關は夫々の登山口、登山中心地を單位として考へたものである。

救助機關は常設的なること

春夏秋冬の別なく登山が行はれてゐる現状に鑑み、且つは、救助作業が機敏迅速に行はなければならぬ點に鑑み、救助機關は常設的のものでなければならぬ。

地方によつては、今日既に存在する組織に若干改良を加へることで目的を達し得るかも知れない。勿論此の場合でも何れの組織をこの救助機關の中心に据ゑるかは謂ふ迄もな

く、地方々々の事情によつて考へられなければならない。

救助機關の組立て

常設機關であることは日夜を通じ誰かがその責任をとつてゐることであり、何時如何なる時でもその機關が、命令一下活動し得ることである。斯くしてその常設機關の責任者を誰にするか、その機關の常備人員或は動員と共に直に動かし得る隊員は如何なる人を以て組織するか問題となる。

救助隊員の資格と訓練

何人も山岳遭難の救助に出る資格を持つてゐるわけではない。殊に冬期に於いて然りである。随つて救助機關の中心責任者を首め、救助隊員として名を列する者には一定の資格を必要とするのではあるまいか、又平時一定の訓練教育を施す必要ありとすれば如何なるものを施すべきであるか。

救助組織の維持

常設機關である以上一定の經常費支辨の途を考へなければならぬ。登山に依つて直接間接に利益を蒙る地元、或は一般登山者が何等かの方法によつて此の經常費の一部でも負擔するやうな具體案があるであらうか。

救助材料

平時に常設して置くものは人員のみではない。救助隊は遭難者に應急手當を施す必要もあり遭難者を運搬する用意もなければならぬ。而し

て應急救助材料が常備される必要がありとするならば、如何に配備し、何を常備品とすべきであらうか。

救助機關と地方官廳、地方團體との關係

平時に於て地方官廳、地方自治體及びその他地方團體との關係を如何に取極め置くかは救助作業の遂行の上にも、萬一の援助應援を求めめる上にも至極重要なことと考へられる。

遭難報知

遭難救助の第一歩は遭難の可及的迅速な報知であり、如何に之をなすかに、遭難救助成否の鍵がある。

登山者の日程を豫め明にしておくことは遭難有無の確認と重大關係があるが、如何なる方法によれば入山者の日程を知ることが出来やうか、遭難のあつた場合の報知方法と手順、山小屋との連絡は如何。

山番、山巡りの如き制度を設けることは不可能であらうか。

他方救助機關の所在と責任者を廣く明らかにして置くことも考ふ可き事柄と考へられる。

救助隊の組織

遭難の急報來と共に救助隊は出動しなければならぬ。随つて平素之が動員方法、その時々第一線第二線の動員計畫、並に救助隊の指揮者に就ても應分の手配を必要とする。

同時に第一線にある救助隊の後立

同時に第一線にある救助隊の後立となる連絡組織や救助本部の陣立なども考へ置く必要があらう。雇大なる救助隊を作ることは救助費

用を大ならしめはするが必ずしも救助作業そのものを効果あらしむるものでない。此の點に就いての統制方法も當然考慮さるべきであらう。

救助隊員の保護

救助隊は犠牲的精神の下に挺身活動するものである。然し救助機關としては此の救助隊員萬一の際に何等かの補償の道を講じて置かなければならない。救助隊員をして後顧の憂なからしめる爲め、その負傷又は遭難に對し如何なる對策を必要とし、如何に之を實行すべきか。

救助費の負擔

個々の事件に關する救助費は原則として遭難者或はその關係者が負擔すべきであらう。然し遭難者の側に於てその能力なき場合の處理如何。

救助費の計算標準

物品購入、その他個々の困難に際し現實に要した費用、並に、救助に出動した人員に對する日當を如何なる標準で計算すべきかは一つの問題である。救助隊に参加した者でも、その部署により仕事の難易の相異があり、危隨の程度も異なる。然も救助に参加した者に對しては一半の日當を支給すべきであるか。

從來の實際の經驗からすれば、遭難救助に際して不必要に雇大なる費用を要したといふ例もある。

要するに折角の救助事業であり乍ら救助者と之を受ける側との間の諒解を缺き爲めに後々までも蟬りを残したといふ經驗に鑑み、費用の算出

基準は、是非とも平常から明確に規定されてゐることを必要とする。

救助隊員外の純粹の有志者の援助を仰いだり、又は醫師の援助を受ける場合もある。かゝる場合の費用は如何に計算すべきであるか。

地方に於いては救助基金の備を有するものもあるが、かゝる制度は如何なる程度迄役立たせ得るか。

救助費の裁定

萬一救助費負擔者の側で救助費が不當であるとした場合、如何なる機關によつて裁定される可きであるか。

救助隊相互の連絡

一つの遭難に際し一地方からのみ救助隊が出るとは限らない。従つて救助作業と關聯して他の地方からの救助隊との聯絡方法も考へ置く必要があらう。或は又かゝる所からして少くとも一定地域内では救助機關相互の平時聯絡又は聯合組織等を必要とするかも知れない。

遭難者側と救助隊との關係

遭難者の側より進んで救助隊の指揮統制に當る事を希望する場合の處置は如何にすべきか。然らざる場合兩者の關係を如何にすべきか。殊に救助作業に於ける遭難者の家族の意見と救助隊の意見と對立する場合の關係は如何に處置すべきか。

救助の範圍

救助隊としての作業は、山岳遭難の如何なる範圍迄適用する可きものか。遭難者死亡の場合でも之が爲めに出勤するものは救助隊と呼ばれ、

總てその規定に従つて行動し處理するべきものであるか。行衛不明の場合救助事業はどの程度迄遂行するべきであるか。 以上

日本山岳會會員諸君に御願

日本山岳會は、近來頻發する山岳遭難事件に鑑み之が各方面に於ける救助機關の統制を期する爲めに、現在各地の山岳遭難救助機關の調査を致してゐます。各方面に登山されました會員で、その土地土地の遭難救助に關する組織を御調べ下さらば會は大變好都合と存じます。此の様な事は、會員が苦心を一にして行かないとよい結果は得られないと思ひます、山から歸つてそれ等の結果を御一報下さい。

参考の爲めに日本山岳會として各地方に問合せを出しました條項は次の様なものです。

地元地方山岳遭難救助に關する問合せ要項

- 一、遭難救助の機關
- イ、組織の有無及び當備の別。
- ロ、統制の中心はどこにあるか。
- (例、警察署、案内人組合事務所、村役場等)
- ハ、統率者は。
- ニ、救助隊の編成方法は如何。
- 一、隊員は如何なる人々より成るか。
- 二、平時より定められたる出勤者の有無及び人数。

ホ、救助用具の備付の有無及種類 (例、登山用具、藥品類、通信機關として利用し得る電話、傳書鳩、犬等)

二、遭難救助に要する費用

- イ、救助に要する費用の積立金の有無、金額及積立の方法。
- ロ、救助費支出先の有無及金額。(例、縣廳、村役場、案内人組合等より支出するもの)
- ハ、出勤者の日當は。
- 一、一定したるものがあるか。
- 二、其金額は何程か。
- 三、登山案内料金との比較。
- 四、醫師同行の場合の費用は何程か。

三、遭難者側より支出する費用

- イ、從來の遭難事件に於ける經費の弁別は。
- 一、地元側にて負擔したか。
- 二、遭難者側で負擔して居るか。
- 三、支出項目の細別。
- ロ、右に就き實例に就て詳細説明を願ひ度。

四、從來の遭難事件を顧みて山岳遭難救助並に其防止対策に就きて御意見を伺ひ度し

- イ、救助機關の組織及び制度に就て。
- ロ、遭難者側に対する注文。
- ハ、地元民に對する注文。
- ニ、村役場、警察、縣廳に對する注文。
- ホ、一般登山者に對する注文。

學校方面山岳遭難救助に關する問合せ

- 一、遭難事件に際して地元側との交渉について
- イ、救助隊搜索隊の編成。
- ロ、その成果。
- 二、經費について。實例につき詳細御報告願ひ度
- イ、例、日常、謝禮、用具費、交通費、通信費、等の細別。
- ロ、經費負擔は(學校山岳部、遭難者の家族、地元側)。
- 三、右に對する御意見 以上

天神峠の新道

吉澤 一郎

三年振りかで谷川岳(といふと武田さんに叱られるかも知れないが)へ行つて見てその登山者の多くなつたのには實に驚きました。土合の信號所へ下りたのが無慮二百人以上、之では時々行衛不明や墜落者が出る事も無理ではないと思ひました。その内過半数は例の登り口の所でできつと清水峠の方へ行つて了ひ暫くしてから西黒澤へ歸つて來る様でした。最早衆知の事も知れませんが天神峠の新道に就て感想を述べさせて戴きます。峠の最高點から舊道は上から來ると右へ折れてゐますが新道は暫く湯槍曾道を辿り、高さにして五十米突(約十分も下つた所)にあるヒュッテの所で右に折れてゐます

それから多分キウツシウラの東斜面と思はれる所をデグデグに下り、タカツボ澤の合から保戸ノ澤沿ひにスキー場を経て神社の所へ出て來る様になつてゐます。之は確かにあの道落しの様な舊道を下るより遙かに樂であります。タカツボ澤の合の所でヒョツとすると下つて來た勢ひで眞直行つて了ふ恐れがありますが一寸注意すれば左側にケルンが積んでありますからその方を行かねばなりません私は右足の關節の痛みを我慢し乍らも天神峠上から温泉まで二時間餘りで下る事が出来ました。事の序ですがあのザンゲ岩のある吾々が普通西黒澤から登る尾根及びあの急な澤には別に名前はないのでせうか。どなたか知つてゐる人があつたら、此の會報上で發表して戴き度いと思ひます。何かにつけて便利ですから。

一緒に行つた友人のKが此の頃谷川へ來る登山者は確かに質が落ちたねと云ひました。私は實例を眼の邊りに見て實際同感した譯でありますも少し山といふものをつまじやかさに登れないものでせうかね。尤も此の頃流行るハイキングとかいふ胸くその悪いもの(名前とその零意氣)一わざ(こんな外國名を持つて來なくとも山野行位でいふのぢやないかと思ひますが)コースに此處が入れられてゐる以上又止むを得ぬ次第かも知れませんが兎に角「遭難型」の澤山登つて來るには呆れました。

アルプス文學

偶々放送を聞いた友人から蕪雜極るものと聞いたのでどんなものかと思つてゐたら「山は誘惑する」といふ標題で出版された「山の講座」の中にその「アルプス文學」なる一節が収録してある。「山！山！山！山！山！山は誘惑する。なつかしい！山々の美よ。清らかに氣高き大自然の姿よ」書かれた事柄には意義を唱へる氣はないが、こんな文章は近頃では中學生でも相手にすまい。流行りかどうかには知らないが、襟首から一度に雨水が流れ込んだやな寒氣を感じる。兎もあれ之は「山は誘惑する」を聞くと第一にぶつかる編者の序言で、編者は「本書は山を愛すること最も強く、山を知ること最も深き山の權威十氏」の放送であると謂つてゐるが、岡田哲藏先生の「アルプス文學」だけは、除外した方がよかつたと思ふ。岡田先生が如何に山を愛されるか、山を知つて居られるかは別とし、又先生の英文學者としての權威を別としても「アルプス文學」の一節は何としても權威者の講話ではない。「歐洲アルプス地方では雪線下の山腹の牧場のことをアルプスといふ」などと云ふ出だしから甚だ頼りない次第だが、大部分がスベンダーの「瑞西禮讚」グリブルの「アルプス登攀物語」ラン（岡田教授に従へばルン）の「アルプス」乃

至は「アルプスに於ける英國人」を要領悪く縮めたり引用したもので、誰が何年に何の山に登つたとか誰がどんな本を書いたとか云ふことをたゞ羅列したやうな話、こんなことで聴手が承知すると思つたら大變な見當違ひだ。岡田先生が「登高行」第一巻に「山岳と文學」を書かれた當時の所で低徊されるのは、よとして此の十餘年の間に山登りする仲間はずしも、權威でなくとも、先生よ

第二回山岳懇談會

前號（第四七號）に豫告しました中央氣象臺の藤原咲平博士を中心とする懇談會は來る九月下旬に開催することに致しましたから右御出席御希望の方は前號にも申上げました通り、
本會事務所内山岳懇談會係宛豫め御通知おき下さいませれば更めて時日會場等は決定次第お知らせします。

第二回懇談會世話人

りは遙かに文献にも史實にも通じて了つて居る次第だ。かと云つてまるで山に縁のない一般の聴手を對象としたのであれば、あれでは何等の啓蒙的意義も持たない獨白に終つてしまふ。「一八〇六年には最初の山岳雜誌アルバイン・ジャーナルが編せられて世人の心を牽いた。一八四〇年より英人のアルプス登攀が加はり一八五四年から一八六五年頃迄多く

の初登山者を生じた。但し瑞、佛、伊の案内は彼等に伴ふた」勿論アルバイン・ジャーナルが始めて出たのは一八六三年三月のことだ。編者の言によれば「藝にJ O A Kより放送される草稿に推敲を重ねられたるものがあるが、一八〇六年は何かの間違ひであらう。全篇を通じ記述が恐ろしく速だしく生徒が先生の講義をノートにとつたやうな關じて肝心の山岳文學論らしいものもなければ、アルプス文學の説明もない。こんなことで譽められては「先蹤者」の著者故大島亮吉君でなくとも泣くだらう。折角なら此の一篇を抜いて残りを一圓位で賣つて方が放送局の男を上げる所以だつたらう。四六版二百七十頁假綴で二圓二十銭は何としても法外な値段だ。（三郎）

會員通信

J、A、Cの内では聖人と君子は誰だと云へば、皆異口同音に二人を擧げるに躊躇しない、その二人がメリケンでは貴府で落ちつたんだからその會話たるや、論語や孟子を現代語に直したやうなものさ、貴公の評判なんぞもいざメリケンにはいゝ景色が見當らないから珍らしい風景をみせてやる。 藤島

アメリカはバカ／＼しく高い建物ばかりで豫想通りツマラナイ處なので別に取立てゝ書くこともない、

毎日碧眼人種の中でアヤシイ英語を喋つてゐる。（六月二日發） 伊藤 田口 宛

米國に渡つてからヨセミテ以外に山らしいものをみながつた故もあるか米國は餘り僕の趣味は合はぬ。 貴府で伊藤秀と四日ばかり駄辯り暮した日が面白かつた位のもの、 ポストンでは Appalachian Mountain Club のルームと圖書室を訪門した、目星しい本は全部揃つてゐる、佛語も著るな本は可成持つてゐる、ウエストンさんの本も二冊ともあつた、J、A、Cの送つた富士山も大事にしてあつたよ、カードと書庫を一覽して虎の門も早くこの位は欲しと思つたね
其後御健康にや、僕至つて元氣、「山日記」山岳」どうしたかと案じてゐる。六月八日に紐育を出て目下太平洋を横断しつゝある オイロハ號にて 六月十日 藤島 黒田 宛

額田 宛 藤島
昨廿七日倫敦より巴里へ飛行機にて到着
「山岳圖書展覽會目錄」並、上、二部 四月五月會報
本年度「山日記」 右入手
展覽會、晩餐會等の状況を想像すると出席出来なかつたのが残念なり 巴里中々むしあつく、閉口
乍御手數、同封葉書夫々廻送願ひたし 六月廿八日巴里にて 藤島 日本山岳會宛
黒部仙人谷登路の新設
黒部猿飛方面から觀岳立山方面への連絡はこれ迄、小黒部尾根坊主小屋から池ノ平小屋へ出るのが唯一の道路であつたが昨春秋黒部保勝會の手により仙人谷コースの開鑿を企てゝゐるが今や完成を告げたから黒部奥鐘から十字峽方面を見て池ノ平に出るには非常に便利となつた、このコースは十キロ米で上りは五時間半下りは二時間である。黒部保勝會
八月の圖書室
例年の通り八月中の本會圖書室開室日は左の如く變更します。
月、水、金、午後五時—九時
火、木、土、休室



會務報告

役員總會及七月定例理事會

七月十一日午後六時本會事務所に於て開催

出席 高頭、小島、武田、冠 楨、島山、松方、額田、三田、逸見、山口、飯塚、三木、黒川、(委任)高野近藤、田部、磯野、高橋、別宮、福島、櫻井、森田、木村

一、山岳遭難救助機關案照賞募集の件

一、來年度役員改選の件

一、山岳第一號編輯報告

一、會則變更確認の件

第九條左の如く變更の件を確認す。

評議員ハ元役員タリシ會員中ヨリ評議員會ノ推薦セル者ヲ以テ之ニ任ズ

但シ必要ニ應ジ、本會々員ニシテ、

前項ニ該當セザル者ト雖モ評議員會

特ニ之ヲ推薦スル時ハ評議員タルコ

トヲ得、評議員ノ任期ハ三ケ年トス

但シ重任ヲ妨グズ。

一、關西支部設置の件可決別記の支部規則を決定す

一、關西支部設置の件可決別記の支部規則を決定す

一、關西紀念大會十月中大阪にて開

催の豫定

關西支部設置せらる

七月定例理事會に於て、關西支部設置の事決定、

關西支部規則

第一條 日本山岳會關西支部ニ日本

山岳會會則第二十六條ニヨリ左ノ

區域内ニ在住スル會員ヲ以テ構成

ス。大阪府、京都府、兵庫縣、滋

賀縣、三重縣、奈良縣、和歌山縣

第二條 支部ニ委員拾名以内ヲ置ク

第三條 委員ハ支部區域在住會員中

ヨリ會長之ヲ依嘱シ其任期ハ貳ケ

年トス、但シ重任ヲ妨グズ。

第四條 支部事務ハ本會關西在住理

事之ヲ擔任シ委員之ヲ補佐ス。

第五條 支部經費ハ本會一般會計ノ

一部ヲ以テ之ニ充ツ、尙支部ハ必

要ニ應ジ有志ノ寄附ヲ仰クコトヲ

得。

第六條 支部ハ毎年一回支部總會ヲ

開キ隨時小集會ヲ催ス。

第七條 支部規則ノ變更ハ役員總會

ノ決議ヲ以テ之ヲ定ム。

新着圖書

奧多摩(それを繞る山と溪谷)

寄贈者 田島勝太郎氏

日本南アルプス登山案内

小島 忠子氏

奥羽の山々(夏山) 秋田營林局

白馬連峯と高瀬溪谷 冠 松次郎著 梓 書 房

先蹤者 大島亮吉著 同

立教大學山岳部々報 第七號

立大山岳部

山峽水 七月號 山梨縣景勝地協會

綱島定治著 上高地附近

同 白馬岳、立山、黒部峽

同人 地 人 社

地學雜誌 六、七月號 東京地學協會

登山とスキー 七月號 黎明 社

ツリースト 七月號

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

山 栗 同 大阪三品山岳俱樂部

旅行 同 東京旅行俱樂部

ベデスツリヤン 同 關西徒步會

嶺 同 東京野歩路會

八王子山岳會報 六月號

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

| | |
|---|-----|
| 東京市山岳部報 | 七月號 |
| OTM會報 | 同 |
| 南嶺會報 | 同 |
| 神戸山岳會報 | 同 |
| 臺灣山岳會報 | 同 |
| 名古屋山岳會報 | 同 |
| MRC會報 | 同 |
| The Alpine Journal No. 250 | 同 |
| May 1935 | |
| The Himalayan Journal 1935 | |
| The American Alpine Journal | |
| 1935 | |
| Ladies' Alpine Club Year book | |
| 1935 | |
| The Geographical Journal Apr.-June 1935 | |
| La Montagne Mars-Mai 1935 | |
| Bulletin d. Club Alpin Belge | |
| Sep.-Dec. 1934 | |
| Die Alpen Apr.-June 1935 | |
| (Inb. A. pino Italiano Mar.-Mag. 1935 | |
| Mountaineering Journal Mar.-May 1935 | |
| Trail and Timberline Apr.-June 1935 | |
| The Prairie Club Bulletin Apr.-June 1935 | |
| Sierra Club Bulletin No. 1-2 1935 | |
| The Mountaineer May-July 1935 | |
| Appalachia Apr.-July 1935 | |
| Revue Alpine (Section Lyonnaise du C. A. F.) No. 300-2me Trim. 1935 | |

| | | | | | | | | | |
|---|---------------------------------------|--|---|----------------------------|--|--------------------------------|--|---------------------------------|--------------------------------------|
| Cumbre Mar.-Apr. 1935 | Bulletin C. A. Catalunya Feb-Mai 1935 | Unionne Figure Excursionisti Mar.-Mag 1935 | Svenska Turistforeningens Arskrift 1935 | Svensk Turistkalender 1935 | Svenska Turistforeningens Tidning Mar.-Juni 1935 | Natural History Apr.-June 1935 | The Scottish Mountaineering Club Journal Apr. 1935 | The Prairie Club Year Book 1935 | Centre Excursionista Aliga Juny 1935 |
| 購入圖書 | | | | | | | | | |
| Carl Egger: Die Eroberung Des Kaukasus 1932 | 岡田武松著 氣象學 上卷(科學叢書第五編) | 會書叢圖書 | | | | | | | |
| Gustave Betsch et Edouard Guillon: LES ALPES SUISSES 1915 | 井深健次著 凍傷(東西醫學別刷) | 以上 豐邊國民氏 | | | | | | | |
| 三省堂英和大辭典 | | | | | | | | | |
| The Concise Oxford French Dictionary | | | | | | | | | |
| 以上 田邊主計氏 | | | | | | | | | |
| 山は誘惑する(放送山の講座) | | | | | | | | | |
| 以上 小島久太氏 | | | | | | | | | |

| | | | |
|--|-----|----------|----|
| 文藝春秋(七月特別號) | | 以上 額田 敏氏 | |
| 第六十八回小集會(關西) | | | |
| 七月十八日午後七時より大阪堂ビル清交社に於て第六十八回關西小集會を開催す。三木理事司會の下に、本會々員住友銀行常務取締役大島堅造氏『古代歐洲に於けるアルピニズムの發達過程に就て』の講演を聴く來會者六拾壹名にして盛會を極む。内會員氏名左の如し。 | | | |
| 今川良雄、若城豐次郎、河本俊彦、森本獎、秋田高吉、下川友記小川正十郎、中原繁之助、西岡一雄、乾正信、津田周二、小倉志郎、影山寅造、榎谷徹藏、三木高峯、別宮貞俊、安藤博、中江喬三、宮崎武夫、梅津猛、杉本俊二、鈴木克更、邑上磯兵、山村功、武内重雄、山口季次郎、下山勇、中村隆郎、金井健二、松井久之助、加納一郎、大島堅造、藤木九三 | 以上 | | |
| 陸地測量部新刊地圖目錄 | | | |
| 昭和十年六月三十日出版 | | | |
| 五萬分一地形圖新版 | 知取 | 一號 | 知取 |
| 同 | 五號 | 上遠古丹 | 一面 |
| 同 | 六號 | 樫保 | 一面 |
| 同 | 七號 | 元泊 | 一面 |
| 同 | 九號 | 珍内川上流 | 一面 |
| 同 | 十號 | 珍内山 | 一面 |
| 同 | 十一號 | 留久志山 | 一面 |
| 同 | 十二號 | 寶澤殖民地 | 一面 |

| | | | |
|---|------------------|------|------|
| 同 | 十三號 | 中倉庫 | 一面 |
| 同 | 十四號 | 西部古丹 | 一面 |
| 同 | 十五號 | 留久志 | 一面 |
| 同 | 十六號 | 牛毛 | 一面 |
| 同 | 五萬分一地形圖修正 | 飯田 | 御嶽山 |
| 同 | 九號 | 宮崎 | 一面 |
| 同 | 五萬分一樺太空中寫眞測量要圖新版 | 宮崎 | 御嶽山 |
| 同 | 名好 | 三號 | 保惠 |
| 同 | 四號 | 初 | 惠 |
| 同 | 七號 | 亞 | 頓 |
| 同 | 八號 | 數 | 香岳 |
| 同 | 十一號 | 西 | 棚丹 |
| 同 | 十二號 | 清 | 水澤 |
| 同 | 十六號 | 名 | 好川 |
| 同 | 惠須取 | 一號 | 內川 |
| 同 | 二號 | 內 | 路 |
| 同 | 三號 | 泊 | 岸 |
| 同 | 四號 | 東 | 柵丹 |
| 同 | 五號 | 植 | 柴山 |
| 同 | 六號 | 新 | 内分水嶺 |
| 同 | 七號 | 新 | 内山 |
| 同 | 八號 | 寶 | 深 |
| 同 | 九號 | 湯 | ノ澤 |
| 同 | 十號 | 武 | 道山 |
| 同 | 十一號 | 惠 | 須取川 |
| 同 | 十二號 | 西 | 知取山 |
| 同 | 十三號 | 塔 | 路 |
| 同 | 十四號 | 惠 | 須取 |
| 同 | 十五號 | 鶴 | 城 |
| 同 | 十六號 | 釜 | 伏山 |
| 同 | 十六號 | 伊 | 皿山 |
| 同 | 十三號 | 數 | 香 |

山岳圖書展覽會目錄

山岳圖書展覽會の爲めに作製した目錄の殘部が若干残つて居ります。右目錄は『山岳』第一號附録として再録される筈であります。右目錄は又それとして保存に値すると思はれます。或は獨立の冊である方が便利かと思はれます。勿論展覽會の目錄でありますから出品の品々に關する解説ではあります。可成り充分内外重要文獻を網羅し居り、且つは何れも内容解説發行年、發行所、判等夫々の要目が記録されて居ります。従つて單なる出品物の解説といふよりも一つの山岳圖書解題として役立つものと思はれます。依而右の次第廣告致します。

目錄內容

解説內容目錄

| | |
|------------|-------------|
| 和洋圖書 | 百三十三點 |
| 地圖 | 八十二點 |
| 寫眞圖版 | 三十二點 |
| 葉 | 四點 |
| 菊 | 五十六頁 |
| 定價 | 並製金五十錢也(送料) |
| 上製金壹圓也(四錢) | |

申込所 本會事務所

昭和十年七月二十八日印刷
昭和十年七月三十一日發行

發行者 額田 敏

編輯兼印刷者 逸見 眞雄

發行所 東京市芝區榮町一(不二番ビル)

日本山岳會
電話一六四九番

廣告一手取扱 進恒社
電話四谷六五四番

多木印刷所刷印

登山關係自動車便調査

(I)

北アルプス

白馬岳、鹿島鎗
糸魚川驛—平岩 二六斤 乗合六〇
錢復往一圓 一日九回 貸切一圓
四月—十二月

四谷驛—細野 二斤 乗三〇 五回
大町驛—鹿島 一二斤 貸切二圓五〇
〇錢 五月—十一月

高瀬入、常念山脈
大町驛—平村笹平 八斤 乗合三〇
貸切一圓五〇錢 四回 五月—十一月

有明驛—一ノ瀬 乗合六〇錢
松本驛—須砂渡 一六斤 乗合五〇
錢 五回 五日—十日

豊科驛—須砂渡 四斤 貸切二圓
鳥川入り上高地乗鞍岳
松本驛—鳥々—上高地河童橋 五八
斤 乗合二圓 貸切八圓 夏十三
回 冬深人迄六回 五月—十一月
中旬

松本 前川渡 三四斤 乗合一圓二〇
〇錢 貸切大野川迄松本より六圓
鳥々より四回降雪の爲奈川渡以遠
不通のことあり

飛騨笠ヶ岳、乗鞍岳
飛騨國府驛—上賣村栃尾 二六斤
乗合二圓四五錢 三回 四月中旬
—十二月

栃尾—槍見温泉 大水害の爲本年度
不通

高山驛—平湯 三二斤 乗合二圓
貸切十圓 六回

飛騨古川驛—船津町—平湯 六一斤
乗合三圓一〇錢

猪谷驛—船津町—平湯 五九斤 乗
合二圓六〇錢

國府驛—上賣村—本郷 乗合一圓五
〇錢 平湯迄貸切一五圓

古川町—船津 貸切五圓五〇錢
船津町—平湯 貸切一〇圓

猪谷驛—船津 貸切七圓五〇錢
高山驛—大八賀村生井 一一斤 貸
切三圓

高山驛—大尾根ヒユツテ 一七斤
貸切五圓

黒部川、立山
宇奈月驛—鐘釣温泉 一四斤 日電
軌道一圓 往復一圓五〇錢 三回
前、七、〇〇—後一、三〇五月—
十一月

千垣驛—藤橋 八斤 乗合五〇錢
十五回 六月—十一月

藤橋—稱名瀧下 五斤 一圓
木曾御岳

久々野—秋神西洞 二〇斤 乗合一
圓二〇錢 貸切五圓 久々野淺井
間一日五回 通年 淺井西洞三回
四月—十一月

木曾福島驛—黒澤 一二斤 乗合八
〇錢 貸切三圓五〇錢 但三名以
上一名増毎に五〇錢

木曾福島驛—王瀧村 二〇斤 乗
合一圓五〇錢 (七月—九月)
一圓三十錢 (十月—六月) 三回貸
切大型一〇圓—十二圓 小型六圓
五十圓

木曾駒ヶ岳
三〇錢往復五〇錢 四回 發前三、
三〇 九・三〇 後二・〇〇 四・
〇〇

赤穂町—光前寺北 四斤 貸切一圓
五〇錢

赤穂町—駒ヶ根橋 六斤 貸切二圓
伊那町—内ノ笠 八斤 貸切二圓五
〇錢

伊那町—横山 六斤 二圓
惠那山及加賀白山
甲津川驛—川上(カオレ)登山口
八斤 乗合二五錢往復四〇錢 六
回 前八、一〇—後六、四五 貸
切二圓五十錢 前宮及正ヶ根谷迄
通ず

加賀白山
高山驛—萩川村牧戸 四九斤 乗合
二圓 貸切一〇圓 三回 前六、
三〇—後二、〇〇 四月—十二月

白山下驛—女原 四斤 乗合二〇錢
貸切一圓五〇錢位 春—秋 一ノ
瀬迄三十二斤自動車路は昭和九年
の水害にて不通となり、十一年度
復舊の見込

勝山町—谷 一〇斤 乗合上り四五
錢下り三五錢 六回 春—秋

南アルプス
甲斐駒、鳳凰山
甲府橋町—芦安村 二〇斤 貸切三
圓、乗合は源村迄三五錢復四五錢
前七、〇〇—後八、三〇 十五回
日野春驛—駒城村新居 九斤 一五
錢 八回 貸切二圓 前七、〇〇
後七、三〇

飯田町—越久保 (小川路峠越元)
一二斤 六〇錢 六回

大台ヶ原山
大軌電車大和上市驛—入之波 四〇
斤 乗合二圓一〇錢 貸切九圓位
行者還嶽大菩薩嶽

大軌電車吉野線下市驛—天川川合
二六斤 乗合一圓五〇錢 多人數
の場合割引の便あり

水ノ山
若櫻驛—湯原 四斤 貸切一圓五〇
錢

四國
剣山
穴吹驛—龍光寺 三五斤 乗合二圓
三〇錢 六回 前四、〇〇—後五
〇〇

眞光驛—一字村葛籠 二八斤 乗合
一圓三〇錢 夏期割引あり八〇錢
内外 五回 前八、〇〇—後六、
〇〇 貸切五圓—六圓

石槌山
伊豫小松驛—千足山村西ノ川山 一
六斤 乗合九〇錢 四回 祭豊中
十回 貸切七圓

九州
市展山

坂)一〇斤 乗合六五錢往復一圓
貸切二圓五〇錢 三回 前七、三
〇 一、三〇 後三、三〇 大
島驛行前九、一五 一二、一五
後五、一五

聖岳遠山川
飯田町—越久保 (小川路峠越元)
一二斤 六〇錢 六回

大台ヶ原山
大軌電車大和上市驛—入之波 四〇
斤 乗合二圓一〇錢 貸切九圓位
行者還嶽大菩薩嶽

大軌電車吉野線下市驛—天川川合
二六斤 乗合一圓五〇錢 多人數
の場合割引の便あり

水ノ山
若櫻驛—湯原 四斤 貸切一圓五〇
錢

四國
剣山
穴吹驛—龍光寺 三五斤 乗合二圓
三〇錢 六回 前四、〇〇—後五
〇〇

眞光驛—一字村葛籠 二八斤 乗合
一圓三〇錢 夏期割引あり八〇錢
内外 五回 前八、〇〇—後六、
〇〇 貸切五圓—六圓

石槌山
伊豫小松驛—千足山村西ノ川山 一
六斤 乗合九〇錢 四回 祭豊中
十回 貸切七圓

九州
市展山

湯前—湯山 一〇籽 乗合六〇錢
 四回 貸切六圓 前七、〇〇—後三、〇〇
 阿蘇山
 豊肥線坊中驛—山上神社前 一八籽 乗合往復一圓 八回 前七、二〇—後四、〇〇 貸切六圓
 宮地阿蘇神社前—山上神社前 二六籽 乗合一圓三〇錢 貸切六圓
 豊後竹田驛—七里田温泉 二〇籽 乗合五五錢 六回
 小野屋驛—七里田驛 二四籽 八〇錢 六回
 久住山
 久住町—久住登山口 八籽 貸切二圓五〇錢
 竹田驛—久住町 一二籽 乗合四〇錢 貸切三圓
 霧島山
 霧島神宮驛—霧島神宮 六籽 乗合二五圓 貸切二圓 七回 小學生團體一二錢
 (追補)
 八ヶ岳、秩父方面
 韭崎驛—安都玉村長澤(美ノ森方面) 二三籽 十二回
 茅野驛—泉野(下槻木) 八籽 乗合三五錢 七回 貸切一圓五〇錢
 茅野驛—親湯 一八籽 乗合一圓
 夏期特別八〇錢 五回 貸切三圓五〇錢
 韭崎—江草 八卷 一六籽 乗合五〇錢 九回 貸切二圓八〇錢
 甲府驛—天神森 一〇籽 乗合四〇錢 往復七〇錢 十二回

「山岳」バックナンバー

| Vol. | No. | 定價 | 送料 | Vol. | No. | 定價 | 送料 |
|------|-----|------|----|------|-----|----|----|
| 4 | 1 | 2.00 | 6 | 9 | 2 | 70 | 8 |
| 4 | 2 | 2.00 | 8 | 14 | 3 | 50 | 8 |
| 5 | 3 | 1.00 | 8 | 15 | 3 | 50 | 6 |
| 5 | 3 | 1.00 | 8 | 16 | 3 | 50 | 8 |
| 6 | 1 | 1.00 | 8 | 17 | 3 | 50 | 6 |
| 6 | 2 | 70 | 8 | 18 | 1 | 50 | 8 |
| 7 | 3 | 1.00 | 8 | 21 | 2 | 50 | 8 |
| 7 | 3 | 1.00 | 8 | 23 | 3 | 50 | 8 |
| 8 | 1 | 70 | 8 | | | | |
| 8 | 2 | 70 | 8 | | | | |
| 9 | 3 | 70 | 8 | | | | |
| | | 70 | 8 | | | | |

(奥上州號)
 (黒部號)
 (臺灣號)

日本山岳會

東京、芝、琴平町一、不二屋ビル307號・振替口座東京四八二九番

大島亮吉遺著

先蹤者

アルプス 登山者小傳

菊判約六七〇頁
 寫眞四十枚
 本麻瑛絲手縫裝
 價六圓千四五

著者が前穂高岳北山稜に忽焉として逝いてから、早くも七星嶺を経過した。而して山に生き山に生を捧げた著者の風格と功績とは、年を逐うてその輝きを増すばかりである。

本書は著者が生前山行の傍ら、熱意を傾倒して研究を續けた歐洲アルプス登山者傳記に關する述作を完全に蒐録せるもので收むると頃四十有餘項目、殆んど大部分は未發表の遺稿である。ドウ・ソーニール以後一世、紀錄の永きに互る間、彼等開拓者は如何に登山を觀じ、如何なる登山經歷を踏み如何に自己の生活と協調隨伴せしめ居るかと言ふごときは著者の最も意を注いだところであつたらしく、これは同時に我々にとりて最も啓示に富む部分に外ならないと信ずる、著者の高名なる幾多隨筆文と相俟ち、この研究書は好個の紀念塔であると共に、また西歐にすら類の少ない登山史上の大著と謂ふべきであらう。

京都帝國大學 遠征隊報告 白頭山

小川琢治序
 白頭山遠征に就て
 準備について
 日誌
 氣象について
 登攀中に於る植物
 生態學的觀察報告
 動物について
 醫學的方面に就て
 寫眞班のノートか
 附錄
 寫眞
 地圖白頭山七萬五千分の一

八月刊行

山會

集募員會
 柳藤辻武木 師 五十香齋
 田原村田暮 師 五十香齋
 國咲太郎 師 五十香齋
 男平吉郎 師 五十香齋
 口一廿至日七十月八自
 間日五
 五十 費會
 呈送物刷印紙詳
 催主部輯編「山」
 臺河駿田神京東
 房書梓
 四四六八七京東發振